

教員養成系における教師の授業改善に向けた ICT 活用指導力育成の取組に関する研究

—本学における『実地教育』『授業実践基礎演習』『特別活動の指導法』のこれからの方向性—

市田克利

(京都教育大学教職キャリア高度化センター)

Research on Efforts to Develop ICT-based Teaching Skills to
Improve Lessons for Teachers in Teacher Training Programs
—Future direction of "practical education," "basic classroom practice seminars,"
and "teaching methods for extracurricular activities" at our university—

Katsutoshi ICHIDA

2024 年 9 月 30 日受理

抄録：2021 年度から GIGA スクール構想による 1 人 1 台端末が実現することになり、学校現場における教員の ICT 活用指導力向上が喫緊の課題となっている。このような状況を踏まえて、2021・2022 年度に『教職課程における教師の ICT 活用指導力の育成に向けた導入的な取組に関する研究』を行い、一定度成果が得られた。2021・2022 年度の研究を受け継ぎ、その成果をもとに学生のニーズを取り入れた次のステップとして、「教師の授業改善に向けた ICT 活用指導力育成」に焦点化し、授業における ICT 活用指導力を育成する取組を 2023 年度に行った。特に「使ってみよう ICT！」講習会を中心に 2021・2022 年度と比較し^{注1)}、取組の成果、さらに学生の変容やニーズが明らかになった。また、この結果をもとに大学の担当授業（『授業実践基礎演習』『特別活動の指導法』）において、ICT 活用指導力の育成を意識して取り入れ、一部学生の変容の調査・分析も行った。さらに本学の『実地教育』における授業の ICT 活用について、学生の意識の調査・分析も行った。

キーワード：授業改善に向けた ICT 活用指導力育成、授業支援ソフト、「使ってみよう ICT！」講習会、
実地教育、大学授業での ICT 活用指導力育成

I. 研究の背景および目的

2020 年 10 月文部科学省から教職課程を置く各大学に、「教職課程における教師の ICT 活用指導力充実に向けた取組について」（中教審初等中等教育分科会教員養成部会）の通知が発出されている。そこには学生が教師の ICT 活用指導力を確実に身に付けることができるよう、各大学に求められる具体的な取組が述べられている。

また、コロナ禍により GIGA スクール構想による 1 人 1 台端末も 2021 年度から実現しており、教育の ICT 化に向けた環境整備が急速に進む中、教員の ICT 活用指導力向上も喫緊の課題となっている。

このような状況下において、現在教員を目指す学生は、小学校・中学校・高等学校において 1 人 1 台端末で学習した経験がほとんどないにもかかわらず、実際に学校現場で教員として働く時には ICT 活用指導力を要求されることになる。1 人 1 台端末が文房具と同様に学校で不可欠なものとなっていくと言われる中、ICT 機器に関して苦手意識のある学生にとっては不安が大きくなるばかりである。

そこで、2021・2022 年度に『教職課程における教師の ICT 活用指導力の育成に向けた導入的な取組に関する研究』において、今学校現場で行われている ICT 活用状況を伝え、教員になるまでに必要な知識・技能を習得させる ICT 活用指導力の育成に向けた導入的な取組を行った。その結果、学生に対して ICT 活用指導力を育成することにより、顕著な変容が見られ、一定度成果が得られた。また、講習会等に参加した学生から、ICT 機器の

操作法や ICT を活用した授業作りのイメージを学べて良かったが、実際の現場ではどのようにして授業が展開されているのかを体験したいというニーズがあった。そこで、2021・2022 年度の研究を受け継ぎ、その成果をもとに学生のニーズを取り入れた次のステップとして、「教師の授業改善に向けた ICT 活用指導力育成」に焦点化し、授業における ICT 活用指導力を育成する取組を行い、新たに研究することを目的とした。

具体的には GIGA スクール構想の推進下にある先行研究、実践に関する訪問調査、京都府、京都市および本学附属学校園の ICT 活用状況を把握し、今学校現場で行われていること、今後必要となることを学生に分かりやすく伝える「使ってみよう ICT！」講習会を 2021・2022 年度に引き続き、2023 年度も継続して行った。また、大学での担当授業において、学校現場での ICT 活用状況の紹介、授業支援ソフトの使用による ICT 活用指導力の育成および附属小学校・中学校訪問の機会を設けた。特に「使ってみよう ICT！」講習会は、“デジタル教科書”、“ロイロノート・スクール（以下ロイロノート）”、“Microsoft Forms・カブート”および“クラウドツール”について、2023 年度は計 6 回行った。そのうち 2 回は、2022 年度の課題を受けての現職教員による講習会を行った。

本研究ではこれらの取組について、2023 年度における ICT 活用指導力の育成の成果、さらに学生のニーズ、講習会の内容などを 2021・2022 年度と比較しながら分析・検討し、今後の取組についての課題と展望を整理することを目的とし、さらに 2022 年度の取組から見えてきた効果的な講習会の進め方や学生のニーズも勘案しながら、将来教員をめざす本学学生に対して、今現場で行われている ICT 活用状況を伝達し、教師の授業改善につながる ICT 活用指導力の育成に向けた導入的な取組を行うことも目的とする。

また、本学の特色ある実地教育（主免・基礎免実習、附属学校参加実習、公立学校等訪問演習 等）における学生の意識の調査・分析も行い、ICT 活用指導力の育成について、今後の課題と展望の整理を行った。

本研究は、2021・2022 年度本学教育研究改革・改善プロジェクトを受け継いだものであり、2021・2022 年度の研究成果を踏まえて、より成果が得られるように、また課題を改善できるように計画し、2023 年度を中心に実施したものである。

Ⅱ．取組の概要

本研究では、前述した目的を達成するために、次の 1～4 について取り組んだ。

1. 学校現場等における ICT 活用状況の把握について

(1) 先行研究、実践に関する訪問調査

2023 年度は、愛知県春日井市立小学校「校内授業研究会」（10 月）、京都市立義務教育学校「研究報告会」（10 月）、愛知県国立大学法人附属中・高等学校「教育研究大会」（11 月）、東京都国立大学法人附属中学校「研究協議会」（11 月）、東京都国立大学法人附属小学校「公開研究会」（1 月）、東京都国立大学法人附属小学校「教育実践指導研究会」（2 月）にそれぞれ参加、また高知県立中学校・高等学校および高知県香美市立小学校（2 月）を訪問し、特に ICT 活用に関する情報収集を行った。

得られた情報は、必要に応じて可能な範囲で、授業や講習会等を通じて学生に伝えた。

(2) 京都府・京都市・本学附属学校園等への情報収集

2023 年度は、京都府宇治市立中学校（1 校、9 月）、京都市立義務教育学校（1 校、11 月）、本学附属学校園（2 校、6 月・11 月）へ担当が訪問し、ICT 活用に関する情報収集を行った。また、2024 年度導入の「デジタル教科書」については、関連業者（2 社、9 月）から情報収集を行った。

得られた情報は、必要に応じて可能な範囲で、授業や講習会等を通じて学生に伝えた。

2. 授業における取組

(1) 『授業実践基礎演習』

2023 年度は、新たに「授業実践基礎演習（前期）」において、2 講座計 90 名の学生が、6 月に京都教育大学附属桃山中学校（以下、附属桃山中学校）を、また 2021・2022 年度に引き続き、「授業実践基礎演習（後期）」において、4 講座計 153 名の学生が、京都教育大学附属桃山小学校（以下、附属桃山小学校）を 11 月に訪問

し、学校現場での ICT 活用について、附属学校教員からの説明を受けたのち、ICT を活用した授業の参観を行い、教員となった時に授業の中で実践的に ICT を活用するイメージを持たせる取組を実施した。

また、「授業実践基礎演習（後期）」4 講座において、学生にロイロノートの ID を付与し、授業で適宜活用した。2024 年度は、「授業実践基礎演習（前期）」2 講座においても、前年度より幅広く授業でロイロノートを活用し、さらに後述の 12/1 講習会で学んだクラウドツールを活用した授業も行った。これらの授業終了時に「小中高の授業における ICT 活用」に関するアンケート調査を行った。

(2) 『特別活動の指導法』

2022 年度に引き続き、2023 年度「特別活動の指導法（a～d）」においても、各学校の ICT 活用の現況と様々な事例を紹介し、今後教員を目指すために必要な能力について考える機会を設けた。また、2024 年度の前期では、後述の 12/1 講習会で学んだクラウドツールを活用した授業も行った。具体的には、毎回の振り返りミニレポートを Google フォームにより提出し、結果のスプレッドシートを提示し、他人の意見を共有した。また、授業内でのグループ活動の記録を Google スライドに記載し、リアルタイムで他のグループの意見を共有した。これらは、学校現場での「特別活動」の授業のみならず、各教科の授業でも有効に活用できることも教授した。

3. 2023 年度講習会の開催

学生対象の「使ってみよう ICT！」講習会を、デジタル教科書 2 回、ロイロノート 2 回、Microsoft Forms・カフト 1 回、クラウドツール 1 回の計 6 回、すべて教職キャリア高度化センター未来教室対応・高度化授業研究室において開催した。

(1) デジタル教科書講習会

①10/31「使ってみようデジタル教科書！①」講習会（以下、10/31 講習会）

日時：2023 年 10 月 31 日(火) 16:20～17:50

参加者：学生 9 名、教員他 3 名

内容：デジタル教科書出版社の方を講師として招き、小学校算数・中学校数学を中心に指導者用、学習者用デジタル教科書の QR コンテンツや使用方法の説明が行われた。参加者は実際に一人一台のタブレットを用いて、小学校算数・理科、中学校数学・理科の使用体験を行った。

②11/7「使ってみようデジタル教科書！②」講習会（以下、11/7 講習会）

日時：2023 年 11 月 7 日(火) 16:20～17:50

参加者：学生 9 名、教員他 2 名

内容：デジタル教科書出版社の方を講師として招き、小学校英語・中学校英語を中心に指導者用、学習者用デジタル教科書の QR コード、AI 教材の機能や使用方法の説明が行われた。参加者は実際に一人一台のタブレットを用いて、小学校英語、中学校英語・国語、高等学校英語・国語の使用体験を行った。

(2) ロイロノート講習会

①7/27「使ってみようロイロノート！①」講習会（基礎編）（以下、7/27 講習会）

日時：2023 年 7 月 27 日(木) 16:20～17:50

参加者：学生 11 名、教員他 3 名

内容：授業支援ソフト「ロイロノート・スクール」の利活用について、児童生徒側の機能を中心に、操作に長けた実践経験のある本学学生の協力を得て、基本的操作、課題の作成、およびデータの送受信の方法を学んだ後、一人一台のタブレットを用いて、ロイロノートの操作方法の体験を児童生徒の立場で行った。

②12/15「使ってみようロイロノート！②」講習会（実践編）（以下、12/15 講習会）

日時：2023 年 12 月 15 日(金) 16:20～17:50

参加者：学生 14 名、教員他 2 名

内容：京都市立義務教育学校の現職教員を講師として招き、実際に学校現場で行われているロイロノートの特性を生かした授業の紹介が行われた。また、ロイロノートを活用した小学校理科・音楽の授業の体験を行った。

(3) Microsoft Forms・カフート、クラウドツール講習会

①11/24「使ってみよう Microsoft Forms・カフート！」講習会（以下、11/24 講習会）

日時：2023 年 11 月 24 日(金) 16:20～17:50

参加者：学生 15 名、教員他 2 名

内容：京都府宇治市立中学校の現職教員を講師として招き、Microsoft Forms やカフートの機能、使用法等の説明が行われた。中学校理科の実際の授業や、特別活動の学級活動・学校行事等での使用を中心に体験が行われた。また、学校業務での ICT 活用についても紹介された。

②12/1「使ってみようクラウドツール！」講習会（以下、12/1 講習会）

日時：2023 年 12 月 1 日(金)

参加者：学生 16 名、教員他 3 名

内容：クラウドツールを有効に活用した授業づくりについて、本学教職キャリア高度化センターの関係分野の教員を講師として招き、各自端末を用いて体験しながらわかりやすく説明が行われた。

4. 「実地教育における ICT 活用」に関するアンケート調査

2024 年 7 月に「実地教育における ICT 活用」のアンケートを行い、学生の意識の調査・分析を行った。

Ⅲ. 取組の結果および考察

1. 学校現場等における ICT 活用状況の把握について

2019 年度から 5 年間の計画で開始された GIGA スクール構想が、2021 年度より 2022 年度、さらに 2023 年度と、年数を重ねるごとに取組や理解がより進んでいるところが随所に把握できた。特に、先行研究校での取組は「個別最適な学び」「協働的な学び」が、ICT を活用することで実現されていることが把握できた。

どの校種においても、2021 年度より 2022 年度、さらに 2023 年度と校内体制が確立し、ICT を活用した授業もより積極的に行われていた。デジタル教科書については、2024 年度から始まる小学校・中学校英語の無償配付の準備が進んでいた。教育実習においても、ICT 活用が 2022 年度より進んでいた。

2. 授業における取組について

(1) 『授業実践基礎演習』、『特別活動の指導法』

『授業実践基礎演習』、『特別活動の指導法』の授業において、上述の“学校現場等における ICT 活用状況の把握”、および後述の“2023 年度「使ってみよう ICT！」講習会”で得られた情報を適宜紹介した。今後教員を目指す学生にとって有意義な機会となった。

特に、『授業実践基礎演習』での附属桃山小学校および附属桃山中学校訪問は、教員となった時に授業の中で実践的に ICT を活用するイメージを持たせる取組となり、訪問後の学生の振り返りから、これも 2021・2022 年度と同様にほとんどの学生が、現場での ICT 活用を見ることによって刺激を受けるとともに、自らが指導力をつけなければならないことを実感してきたことが分かった。

また、『特別活動の指導法』では、特に Google フォームの結果のスプレッドシートの共有、および Google スライドのリアルタイムでの共有については、学生からも今後教員になった時に有効に活用できる、できるようにしたいという感想を多く得ることができた。

(2) 『授業実践基礎演習』でのロイロノート活用

2023 年度「授業実践基礎演習（後期）」4 講座におけるロイロノート活用は、学生の ICT 活用指導力の育成に効果的であった。2022 年度までは附属桃山小学校訪問時にロイロノート体験を行ったが、2023 年度は体験から、ロイロノートの授業における活用に内容を変更した。

2024 年度「授業実践基礎演習（前期）」2 講座におけるロイロノート活用は、2023 年度「授業実践基礎演習（後期）」4 講座よりさらに多くのスキルを学ぶことができた。普段の授業でロイロノートを使用することで、着実に ICT を活用する能力が向上した。

(3)『授業実践基礎演習』での「小中高の授業における ICT 活用」に関するアンケート

2023 年度「授業実践基礎演習（後期）」4 講座、および 2024 年度「授業実践基礎演習（前期）」2 講座において、「小中高の授業における ICT 活用」に関するアンケート（計 163 名回答）を行った。主なアンケート項目と、その結果・分析を次にあげる。

①あなたはこの講座で「授業における ICT 活用」についての関心が深まったと思いますか？

(ア)とても思う(89 名 54%) (イ)思う(72 名 44%) (ウ)あまり思わない(2 名 1%) (エ)思わない(0 名 0%)

②あなたはこの講座で「授業における ICT 活用」の指導力が身についたと思いますか？

(ア)とても思う(41 名 25%) (イ)思う(106 名 65%) (ウ)あまり思わない(15 名 9%) (エ)思わない(1 名 1%)

③授業実践基礎演習の受講前・受講後で、「授業における ICT 活用」の関心の深まりや指導力が身につくことについて、自身の変容があれば記述してください。

【回答抜粋】・ロイロノートが使えるようになった。 ・ロイロノートの使い方がよりわかった。

・ICT についての使い方の知識が深まった。 ・ICT の力を身につけないといけないと思った。

・どの場面で ICT を使えばいいのか学べた。 ・ICT を実技系の授業にも活かそうと考えるようになった。

・附属桃山小学校の訪問で、教育現場でここまで ICT が導入されているとは思わなかったのでかなり驚いた。具体的な活用方法も多く学ぶことができたので、今後の教育実習などにも活かしていきたい。

・附属桃山中学校での授業参観で、ICT が実際に使われていた様子や使ってみてのメリットなどを話してくださったので、授業で使うイメージが持てた。

④今後の授業実践基礎演習において、「授業における ICT 活用」の関心が深まり、指導力が身につく取組で、行って欲しいものがあれば、記述してください。

【回答抜粋】・ロイロノートを実際に教師として使う模擬授業の実践

・実際にロイロノート等の生徒の解答をまとめられるツールの実践的な扱い方

・ロイロノート以外の ICT 活用 ・デジタル教科書の使い方 ・デジタル教科書を使った模擬授業

①の結果から、学生にとっても ICT 活用に関して、概ね関心が深まった。また、②の結果から、ICT 活用指導力も概ね身に付けることができた。

③では、ロイロノートの操作や活用方法の理解が進んだという回答が多く、ひいては教育実習に関しての不安を払拭できた学生もいた。ICT 活用の有用性まで考えることができた学生がいたことも成果であった。学校現場での ICT 活用を参観することは、やはり多くに学生に影響を与えるものであった。

④では、ロイロノートに関するものが多く、教師側の機能や操作をより行い、実践的に身につけていきたいという意見が多かった。

3. 2023 年度講習会の参加状況について

計 6 回の講習会における学生の参加のべ人数 74 名（2022 年度 6 回 63 名、2021 年度 4 回 67 名、）に対し、実質参加者（複数回参加は 1 名とする）は 39 名（2022 年度 31 名 2021 年度 28 名）であった。そのうち講習会 2 回以上の参加者合計は 16 名（41%）、3 回以上の参加者合計は 10 名（26%）であった。複数回参加する学生は 2022 年度 14 名（45%）、2021 年度 22 名（79%）よりは割合が少なかった。2023 年度はデジタル教科書、ロイロノート以外の講習会も行なったため、自分の学びたい講習会に絞って参加した学生が多かったと考えられる。全体的には 2023 年度も意欲的に学ぼうとしている姿が見られた。

4. 2023 年度講習会のアンケート調査について

「使ってみよう ICT！」講習会は、毎回参加者にアンケートを行った。アンケート項目は一部を除き 2021・2022 年度と同じものにした。主なアンケート項目と、その結果・過年度比較・分析を以下にあげる。

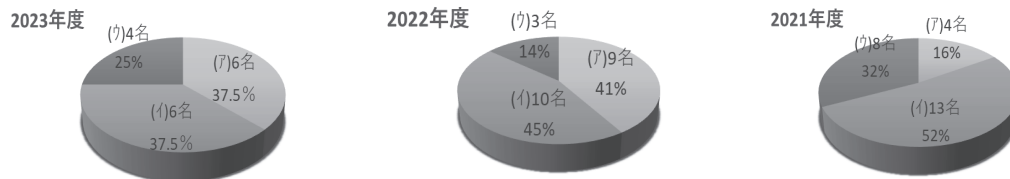
(1) 10/31 講習会、11/7 講習会のアンケートより

①デジタル教科書について？（16 名回答）

(ア)デジタル教科書を見たことも、使ったこともない（6 名）

(イ)デジタル教科書を見たことはあるが、使ったことはない（6 名）

(ウ) デジタル教科書を使ったことがある (4名)



デジタル教科書を使ったことがないという学生が、2023 年度 75%、2022 年度 86%、2021 年度 68%であり、まだまだその割合は高い状態である。

② 今回の講習会に参加して、参加前後での自身の変容があれば記述してください。(13名回答)

【回答抜粋】・デジタル教科書やデジタル教材に関する知識が増えたこと。

・今までよりスムーズな授業の構想を得ることができた。・もっと勉強して効果的に使えるようにしたい。などの記述があり、学生にとって有意義な取組となった。

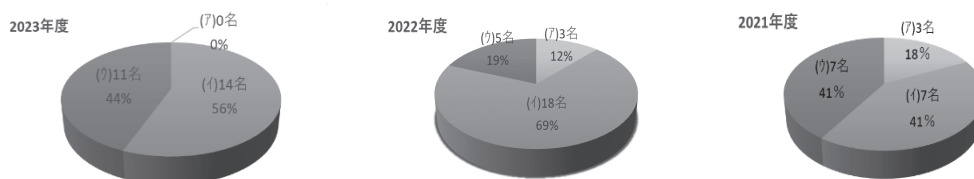
(2) 7/27 講習会講習会、12/15 講習会のアンケートより

① ロイロノートについて? (25名回答)

(ア) ロイロノートを見たことも、使ったこともない (0名)

(イ) ロイロノートを見たことはあるが、使ったことはない (14名)

(ウ) ロイロノートを使ったことがある (11名)



ロイロノートを使ったことがないという学生が、2023 年度 56%、2022 年度 81%、2021 年度 59%であり、デジタル教科書ほどではないが、まだまだその割合は高い状態である。

② 今回の講習会に参加して、参加前後での自身の変容があれば記述してください。(17名回答)

【回答抜粋】・ロイロノートを授業で積極的に使おうと思った。・モチベーションが高まった。

・教師目線で、ロイロノートを使用して授業を行うことがより身近になった。

・参加前後で、ロイロノートの活用例を知って授業の中でどのように活用するか考えさせられた。

などの記述があり、学生にとって有意義な取組となった。

(3) 11/24 講習会のアンケートより

① カフートについて? (13名回答)

(ア) カフートを見たことも、使ったこともない (9名)

(イ) カフートを見たことはあるが、使ったことはない (2名)

(ウ) カフートを使ったことがある。(2名)

カフートに関する講習会は、今年度が初めてであり、学校現場の授業で良く使用されていると聞くが、使ったことがない学生の割合は高い。

② Microsoft Forms について? (13名回答)

(ア) Microsoft Forms を見たことも、使ったこともない (10名)

(イ) Microsoft Forms を見たことはあるが、使ったことはない (1名)

(ウ) Microsoft Forms を使ったことがある (2名)

Microsoft Forms に関する講習会は、今年度が初めてである。担当講師から、Excel に集約できるので互換性が良く、校務処理にも使用しやすいという話がなされた。ただ、カフートと同様に使ったことがない学生の割合は高い。

③今回の講習会に参加して、参加前後での自身の変容があれば記述してください。(13 名回答)

【回答抜粋】・カフトと Microsoft forms の存在を知り、使えるようになった。

- ・自分でも作れるぞという気持ちになれた。
 - ・ ICT への苦手意識が和らいだ。
 - ・カフトは生徒うけがよく、楽しく学べる教育の第一歩になると思う。
 - ・ ICT は資料提示のイメージがあったが、楽しく学ぶためにも活用できると感じた。
- などの記述があり、学生にとって有意義な取組となった。

(4) 12/1 講習会のアンケートより

①Google Workspace について？ (13 名回答)

- (ア) Google Workspace を見たことも、使ったこともない (8 名)
- (イ) Google Workspace を見たことはあるが、使ったことはない (2 名)
- (ウ) Google Workspace を使ったことがある (3 名)

Google Workspace に関する講習会は、今年度が初めてであり、本学での使用頻度も高いと思われたが、使ったことがない学生の割合は高い。

②今回の講習会に参加して、参加前後での自身の変容があれば記述してください。(8 名回答)

- 【回答抜粋】・教育形態の変容を体感した。
- ・個別最適な学びをより一層意識していきたい。
 - ・ ICT 機器を「使う」という意識が薄れた。当たり前で授業を作ろうと思えた。
 - ・資料提示以外で ICT を活用したいと思うようになった。
 - ・ ICT を活用する意欲が湧いた。
- などの記述があり、学生にとって有意義な取組となった。

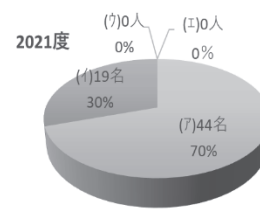
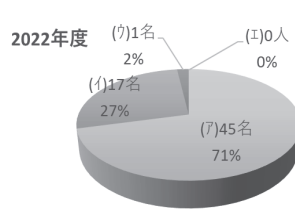
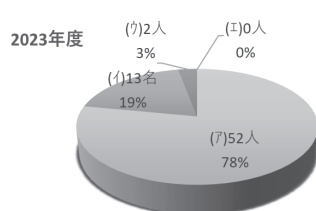
(5) 講習会全体を通して

2021・2022 年度と同様にすべての講習会において、「今回の講習会はいかがでしたか？」

(ア)大変良かった (イ)良かった (ウ)あまり良くなかった (エ)良くなかった

という項目を設け、併せてその理由も尋ねた。結果は次の通りとなった。(表中数値は人数)

	回答者数	(ア)	(イ)	(ウ)	(エ)
10/31・11/7講習会	16	10	6	0	0
7/27・12/15講習会	25	19	5	1	0
11/24講習会	13	13	0	0	0
12/1講習会	13	10	2	1	0
合 計	67	52	13	2	0



計 6 回の講習会についてほとんどの学生が肯定的に捉えていて、これは 2021・2022 年度とほぼ同様の結果で、学生にとってたいへん好評であった。

(ア)、(イ)の回答の理由は、次の通りである。

【回答抜粋】

<10/31・11/7 講習会 (16 名回答) > ・デジタル教科書を実際に体験することができたから。

- ・実際に触ってみてデジタル教科書の良さを改めて知れたから。
- ・今後の話や学校で働いた時の活用など詳しく聞くことができ、将来に繋がりそうだと感じたから。
- ・デジタル教材は想像していたよりも効果的な使用が期待できると感じたため。
- ・デジタル教科書以外にも様々なコンテンツについて知ることができたから。

<7/27・12/15 講習会 (21 名回答) > ・使い方がわかったし、実習で使いたいと思えたから。

- ・ロイロノートの使いやすさを理解できたから。
 - ・実際の操作方法もわかり、実践してみたいと感じた。
 - ・小学校での活用を具体的に知ることができたから。
 - ・自分が知らない ICT 利用について知ることができた。
 - ・ICT 活用について、ワクワクするような活用方法があると感じた。使ってみようと思えた。
 - ・初心者でも分かりやすかったから。
 - ・ロイロノートの使い方が広がった。
 - ・現場の様子を知ることができたから。
 - ・楽しく取り組めたため。
 - ・体験型でイメージしながら学べたから。
- <11/24 講習会 (13 名回答)> ・知らないものを学べた。
- <12/1 講習会 (13 名回答)> ・体験型なのが良かった。具体的にイメージできた。
- ・ICT の活用においての考え方がわかったから
 - ・今の教育現場の現状を知ることができ、大変面白かった。
 - ・学校現場での具体的な活用方法が映像と解説などを通して分かったから。
 - ・ICT の具体的な使用法やツールを知れたことや欠点の補い方などを疑問点が解消された。

講習会で扱う題材が異なるものの、実際に使用して体験することによる学びが得られたことが好評の理由であった。また、現職教員や大学の関係分野の研究者による講習会は、学校現場でどのように ICT 活用がなされているのか、ICT の活用においての考え方の理解などを具体的に学べたことが好評の理由であった。

5. 「実地教育における ICT 活用」に関するアンケート調査

2024 年 7 月「実地教育における ICT 活用」に関するアンケートを行った。本学の実地教育において、公立学校等訪問演習（原則 1 回生で履修）、附属学校参加実習（原則 2 回生で履修）を履修した主に 3 回生（一部 4 回生）の学生が対象で、小学校主免学生より 78 名回答（4 回生 3 名、3 回生 75 名）、および中学校主免学生より 65 名回答（4 回生 1 名、3 回生 64 名）が得られた。なお、小学校主免学生は、すべて主免実習 10 日間を終え、9 月に 8 日間残している。中学校主免学生は、4 回生 1 名を除きすべて主免実習を 3 日間終え、9 月に 15 日間残している。主なアンケート項目と、その結果・分析を次にあげる。

(1) 小学校主免学生（以下、学生小）、中学校主免学生（以下、学生中）の共通アンケート項目について

- ①「公立学校等訪問演習」で、ICT を活用した授業を参観しましたか？
 (ア)はい（学生小 26 名 33%、学生中 18 名 29%） (イ)いいえ（学生小 52 名 67%、学生中 45 名 71%）
- ②「公立学校等訪問演習」で、ICT を活用した授業を、これまでより多く参観したいと思いますか？
 (ア)はい（学生小 65 名 84%、学生中 50 名 81%） (イ)いいえ（学生小 12 名 16%、学生中 12 名 19%）
- ③「附属学校参加実習」で、ICT を活用した授業を参観しましたか？
 (ア)はい（学生小 48 名 62%、学生中 27 名 42%） (イ)いいえ（学生小 29 名 38%、学生中 37 名 58%）
- ④「附属学校参加実習」で、ICT を活用した授業を、これまでより多く参観したいと思いますか？
 (ア)はい（学生小 69 名 90%、学生中 57 名 90.5%） (イ)いいえ（学生小 8 名 10%、学生中 6 名 9.5%）
- ⑤「主免実習」では、ICT を活用した授業を行う予定ですか（行いましたか）？
 (ア)はい（学生小 50 名 64%、学生中 50 名 77%） (イ)いいえ（学生小 28 名 36%、学生中 15 名 23%）
- ⑥大学の授業において、教育実習などの実地教育で役立つような ICT 活用力をつける内容を、これまでより多く入れて欲しいと思いますか？
 (ア)はい（学生小 67 名 86%、学生中 54 名 87%） (イ)いいえ（学生小 11 名 14%、学生中 8 名 13%）

①～④の結果から、「公立学校等訪問演習」や「附属学校参加実習」において、ICT を活用した授業を一定程度参観しているものの、さらに参観したいというニーズが高い。②、④に関してはその理由を尋ねたが、(ア)に対しての理由は、様々な意見があったが、②、④ともに最も多かったのが“これからの時代、ICT 活用が必須になるため”という類の意見で、②が 25%、④が 46%であった。(イ)に対して理由は、②では“1 回生時は ICT よりも授業の基本的な構成や教師の言葉掛けなどに注目する方がいいのではないかなと思うから”や“学校の中にはいるのが目的だと思うので、まずは学校の雰囲気をつかむことが重要だと思う”、④では、“ICT についての参観が今のままで十分だと思ったから”や“まずは実習校の雰囲気に慣れたい”という意見もあった。

⑤については、およそ 70%の学生が ICT を活用した授業を行うことが分かった。具体的にどのようなものを使用するかを尋ねると、学生小ではロイロノート 48%についてパワーポイント 20%、学生中ではパワーポイント 58%についてロイロノート 18%であった。校種による差が出たのは、実習校である附属小学校

でのロイロノートの使用率の高さや、校種による授業形態の違いが考えられる。

⑥については、ICT 活用力をつける内容を大学の授業に取り入れることのニーズがかなり高い結果となった。具体的にどのような内容を入れて欲しいかを尋ねると、学生小ではロイロノート 39%、学生中ではロイロノート 24%であった。パワーポイントについては散見される程度で、その他は“ICT を活用した授業についての実践的な指導”、“チャット GPT を用いた授業”、“児童生徒の発達段階に応じてどのように活用するのが有効か”など、様々な意見があった。ロイロノートの割合が高く、パワーポイントの割合が低かったのは、学生が大学に入学するまでに使用していたか否かの違いであると考えられる。

IV. まとめ

1. 取組の成果

「Ⅲ. 取組の結果と考察」より、今回の取組は全体として有用であり、2021・2022 年度と同様に一定程度成果があったと判断できる。特に計 6 回行った講演会については、そのアンケートの結果からも学生にとって有意義なものであり、講習会前後の変容についても成果が認められる。現職教員の講習会は、学校現場でどのように ICT 活用がなされているのかを学べたことが学生のニーズに応えとともに、2022 年度の課題の改善となった。

また、「小中高の授業における ICT 活用」・「講習会」アンケート結果から、「授業改善に向けた ICT 活用指導力育成」、授業における取組から「学校現場における ICT 活用状況の把握、ICT 活用指導力の必要性の理解」についても、2021・2022 年度と同様に概ね成果があると判断できる。特に、大学の授業においてのロイロノート活用やクラウドツール活用は、講習会より多くの学生の「授業改善に向けた ICT 活用指導力育成」に効果的であった。さらにこれらの成果は、2021・2022 年度と同様に、今後本学の ICT 関連事業を支援する教職員および学生の人材育成、本学の特色ある事業としての発展性、京都府・京都市教育委員会、附属学校園との連携強化に活用できる可能性がある。

2. 今後の取組

今回の講習会をはじめとする本研究の取組は、その成果から学生に対して有用であり、今後 ICT 活用指導力の向上が教員に益々求められることから、継続していくことは有意義なことである。ただ、希望者による講習会では、時間の設定上参加人数に限りがある。より多くの学生に「授業改善に向けた ICT 活用指導力育成」を図るには、大学の授業に組み入れていくことが必要である。このことは、『授業実践基礎演習』での「小中高の授業における ICT 活用」に関するアンケート結果からも明白である。さらに、教育実習などの実地教育においては、ICT 活用指導力が発揮される場面でもあり、「実地教育における ICT 活用」に関するアンケート結果からも、大学の授業での組み入れのニーズはとても高い。個々の授業担当者が行うより、大学として組織的に系統立てて取り組んでいくことが必要であると考え。

このような点を踏まえて、今後大学として組織的に取り組むための授業ごとの方策を次にあげる。

(1) 『授業実践基礎演習』

模擬授業を行う際に、『公立学校等訪問演習』や『附属学校参加実習』で参観した学校現場の ICT 活用授業から学んだことを各自が取り入れて模擬授業を行う。具体的には、ロイロノートやクラウドツール等を使用し、スキルを高めるとともに、全体で共有することで授業における ICT の効果的な活用を考えていくようにし、主免実習や副免実習での授業づくりの礎としていく。

(2) 『特別活動の指導法』

各学校の特別活動を多く紹介し、ICT 活用が有効である場面とそうでない場面を考える機会をより多く設定する。また、教科の授業づくりとは異なった ICT 活用を学ぶ機会を設定する。さらに、生徒会活動や学校行事、ひいては学級経営での ICT 活用を考える機会を設け、主免実習や副免実習での特別活動の授業づくりの意識を高めるようにする。

(3) 『公立学校等訪問演習』

学生のニーズを踏まえて、今後より多く ICT を活用した授業参観を行う。大学側から訪問校にその趣旨を

伝え、訪問の回を重ねるごとにステップアップするような設定を行い、振り返りを全体で共有することで ICT の効果的な活用の視野を広めるようにする。

(4)『附属学校参加実習』

学生のニーズを踏まえて、今後より多く ICT を活用した授業参観を行う。附属の実習校にも、学校独自の授業における ICT 活用の考え方を説明してもらい、学生が授業づくりのイメージを持てるようにして、『授業実践基礎演習』の模擬授業に取り入れていくようにしていく。また、『附属学校参加実習』は主免実習を行う附属学校で行うため、ICT 活用による児童生徒の反応をしっかりと観察し、主免実習の糧となるようにする。

(5)『公立学校インターンシップー教育課題研究実施演習ー』

『公立学校インターンシップー学校インターンシップー』

主免実習を終えた学生が、さらに学校現場を経験する機会であるため、参加学生のモチベーションは高い。主免実習で附属学校での授業における ICT 活用の学びを、さらに広げる機会であり、公立学校での現況を知ることによって、ICT の効果的な活用をより考えていくようにする。また、各学校での取り組みを全体で共有することにより、学びを深めていくようにする。

3. おわりに

2023 年度の取組は、2021・2022 年度に比べて、教師の授業改善を念頭に、学校現場でどのように ICT が活用されているかを中心に行った。そもそも学校教育における ICT 活用については、学校教員も自身が小学校・中学校時に経験していない場合が多い。しかし、2021・2022 年度と比べると、環境の整備や研修会の充実もあって、確実に教員の ICT 活用指導力について向上していることが、訪問や聞き取り等で明らかになった。学生も確実に ICT 活用に対する順応性も向上し、操作も早くなっている。今後は、ICT 活用さえしていればよいのではなく、ICT 活用でより児童生徒にとって効果的な授業を行えるような授業改善が重要となる。

付記

本研究は、「令和 5 年度教育研究改革・改善プロジェクト経費」の助成を受けたものであり、京都教育大学教職キャリア高度化センター市田克利、中垣ますみ、椋山直美が 2023 年度に取り組んだ。また、ご協力をいただいた京都教育大学附属桃山中学校秋山雅文先生、京都教育大学附属桃山小学校桑名良幸先生に深謝申し上げます。

注1)

2021 年度のデータは、市田克利・中垣ますみ・福間拓・椋山直美（2023）「教職課程における教師の ICT 活用指導力の育成に向けた導入的な取組に関する研究」『京都教育大学教職キャリア高度化センター実践研究紀要』第 5 号,pp.195-204 より引用した。

2022 年度のデータは、市田克利・中垣ますみ・椋山直美（2024）「教職課程における教師の ICT 活用指導力の育成に向けた導入的な取組に関する研究(2)」『京都教育大学教職キャリア高度化センター実践研究紀要』第 6 号,pp.105-114 より引用した。

引用・参考文献

- 中央教育審議会（2021）『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～』（答申）
- 中央教育審議会初等中等教育分科会教員養成部会（2020）『教職課程における教師の ICT 活用指導力充実に向けた取組について』（通知）
- 市田克利・中垣ますみ・福間拓・椋山直美（2023）「教職課程における教師の ICT 活用指導力の育成に向けた導入的な取組に関する研究」『京都教育大学教職キャリア高度化センター実践研究紀要』第 5 号,pp.195-204
- 市田克利・中垣ますみ・椋山直美（2024）「教職課程における教師の ICT 活用指導力の育成に向けた導入的な取組に関する研究(2)」『京都教育大学教職キャリア高度化センター実践研究紀要』第 6 号,pp.105-114